

私の戦争体験

静岡県 岩村 伊勢二

私は大正八（一九一九）年二月生まれで、昭和十五（一九四〇）年一月十日に近衛歩兵第一連隊に入営、甲種幹部候補生として盛岡予備士官学校を卒業後、原隊復帰、昭和十六年十月三十一日、現役満期除隊、十一月一日、歩兵第一〇一連隊に臨時招集、陸軍少尉に任ぜられ、直ちに陸軍兵器学校に派遣を命ぜられました。

昭和十六年十二月八日の大東亜戦争開戦は、兵器学校で知りました。学友は次々に原隊に復帰、出陣し、私達残留者は出陣命令を今日か明日かと待ちましたが、遂に命令が来ず、昭和十七年一月三十一日に陸軍兵器学校を卒業、昭和十七年二月一日に関東軍付けを命ぜられました。関東軍司令部に行けば必ず第一線部隊に編入される。これが内地での最後の機会だと、親族、友人に別れを告

げ、勇躍単身で満州国新京（長春）の関東軍司令部に出頭致しました。

関東軍司令部では兵器学校同期の戦友五人と一緒にになり、共に関東軍野戦兵器廠牡丹江支廠（第四五〇部隊）勤務を命ぜられ、直ちに出發しました。

牡丹江は東満州のソ連国境地帯で、当時は軍設備の増設や町造りで非常に活気がありました。

ここで野戦兵器廠の仕事を簡単に紹介します。

野戦兵器廠の仕事は、日本や満州で造られる兵器・弾薬の集積、整備、手入れ、及び各作戦に必要な兵器弾薬の補充等で、当時は支那大陸の各大作戦、南方諸地域での戦闘等に支障を起こさないようにするための兵器、弾薬の輸送等、いずれも重要な任務でした。そして二十四時間の連続作業のために、毎日の皆の疲労と労苦は大変なものでした。

部隊には三千人の苦力（クリー）がおり、下士官や兵は、このクリーを使って、主として兵器弾

薬の集積、貨車の積み降ろし、下士官は書類作成、軍属は兵器（押収兵器等）の修理整備等を行うのです。

昭和二十年八月十日のソ連軍の満州進攻当時の牡丹江付近の状況を説明しますと。

昭和七年九月に満州国が独立しました。当時日本は不況で、志ある者は大陸へ、満州へと進出していました。政府も満州開拓団を募集しソ連国境近くに入植させました。

入植者は寒気と荒れ地と戦いながら、十数年の苦闘の末、やつと米、野菜、家畜も順調に収穫出来るようになり、子供も生まれ一息と言うところでした。

一方、関東軍は昭和十九年より各地の戦争が悪化し、日本本土防衛のためには戦線を縮小せざるを得なくなり、司令部を吉林省トソカに後退し、国境守備隊を鏡白湖・大石頭山岳地に配置する作戦計画を立てていました。

これは昭和二十年四月ごろから実施され、国境

にはほとんど警備隊はおらず、その上、昭和二十年七月には在満日本男性の大召集が行われました。このため町にも開拓団にも男はおらず、女、子供のみで留守を守っていると云った状況でした。

以上のような現地状況の八月十日、突然ソ連軍が戦車を先頭に装甲車トラックを連ね、一挙に進攻してきたので、留守中の女、子供は何の抵抗も出来ず、何の保護も受けられず、ただ生きるために牡丹江目指して逃げるよりほか、生きる道はありませんでした。

そこで女は頭を坊主にし、顔に土を塗り、仕事着を着て子供を背負ったり手を引いたりして団体を作り、昼間はコーリヤンやポシミ畑に隠れ、夜行軍で逃げました。

その折、子供が大声で泣き出し、団長は団体がソ連兵に見つかると恐れて子供を団体から離したり、また動けない子供を満人部落に置いて来たり、悲しい別れをしたと聞きました。またトソカでは、近隣から集まった女、子供は飛行場の格納

庫に収容され、食い物飲み物も無く、暑い最大変苦勞していると聞きましたが、私達には何もしてやる事が出来ませんでした。

私は昭和二十年七月二十五日付で、歩兵第三八二連隊第四中隊長を命ぜられ、二十六日に大石頭の連隊に着任しました。

連隊は大石頭駅の近くの丘に天幕を張り、各隊共召集された私服の男が集まっていました。軍服も無く兵器も無く、ただの日本人の集団でした。

連隊本部に出頭すると連隊長より「直ちに牡丹江兵器廠に出張、兵器を調達せよ」との命令を受け、中隊に落ち着く間もなく兵器調達に出張しました。兵器廠は各部隊の兵器受領者でテンテコ舞いでしたが、やっと兵器を整え、大石頭の駅に着いたのが八月十六日の昼ごろだったと思います。

駅に着くと連隊副官が待っていて、「昨十五日、玉音放送があり戦争は負けた、部隊は兵器をソ連軍に引渡しトンカに集合する。兵は現地召集者だから自由行動とする」と伝えられ、直ちに兵器を

降ろし、希望する者を乗車させ集合地に向かいました。

集合地では将校・下士官・兵に分けられ、軍としての指揮系統を完全に無くされ、私は建築途中の将校宿舎に入れられました。ここでは、時々集められる私役のほか、ほとんど作業は無く、これからどうなる事かと希望の無い日々を過ごしていました。

寒さが気になりだした十月五日ごろでした、「皆を日本に帰すため、牡丹江の液化駅まで行軍する。荷物をまとめておけ」と言われました。皆、唐米袋でリュックサックを造り、防寒衣類、肌着を詰め込み、ソ連兵の荷物検査を受け出発しました。辛い行軍でしたが落伍すれば命の保証はなく、また内地に帰れると言う希望を持ちながら、何とか液化駅に到着しました。全行程三百キロ、九日間で歩きました。

液化では、兵器廠で働く現地労働者の住んでいた半洞窟のバラックに入れられ、何もすることが

無く、ただ迎えの列車を待つばかりでした。十一月三日、明治節の朝、待ちに待った列車が到着しました。

貨車は二十トン貨車で、両側に二段の棚があり、中央にダルマストープと小便所がありました。一両に四十人が割り当てられ、寝るしか出来ない狭い貨車で生活が始まりました。

列車は夕方発車、国境守備をしていた戦友が、「国境には夜中に着く、東に行けばナホトカ、西に行けばシベリア行きとなる」注意しようと言いました。

午前二時ごろ、「今、満州里の町の灯が見えた。俺達はシベリアに向かっている。日本には帰れないぞ」と騒ぎだし、一辺に希望を無くしました。それから、この先どうなる事かとか、故郷の話ばかりに話題が変わりました。出発十日ぐらいいして、たしかバイカル湖岸の大きな町に着いた時でした。「今日は衣類の消毒と入浴をさせる。衣類全部を持って外に出よ」と言われ、外に出ると大き

な建物に連れて行かれました。中は汗ばむほどの温度でした。

裸になり衣類は衣掛けにして右の部屋に吊るし、素つ裸のまま左の部屋に行かされ、部屋の入口で、バリカンで頭・脇・下の毛を全部刈りとられた後、鉄帽一杯の湯をくれ、「良く身体を洗うように」と指示されました。衣類を着、頭からDDTをかけられて外にでました。

通訳から「一二〇度ぐらいの高温で蚤、虱を死滅させ、毛を刈ったのは毛ジラミを無くし伝染病を予防する処置だった」と聞きました。消毒が終わり、また貨車生活が十一月三十日まで続きますが、各駅に着く度に車内で燃やす木切れや石炭を盗むことが唯一の仕事でした。

十二月一日、目的地タンボフ駅に着きました。駅付近は二十センチぐらいの積雪があり、歩いてラーザの森第百八十八捕虜収容所まで行きましたが、二十七日間の貨車生活ですっかり足が弱くなり、約二キロの距離を半日かかったことを覚えて

います。この収容所は独ソ戦の時、モスクワ防衛のためのソ連陣地の仮兵舎でした。やはり半洞窟のバラック建てで、真中に通路、ダルマストープが五メートルごとに据えられ、両側に二段づつの棚（寝台）があり、一人一メートル弱の場所が割り当てられていました。

収容所に入れられてから、昭和二十一年五月の解氷期までは仕事は無く、自分達の燃やす薪取りと倉庫に貯えられた野菜の手入れが主な仕事でしたが、一万人近くの集団の燃やす薪は多く、特に零下三〇度近くまで下がる一月、二月は相当なものでした。薪は近くの森の木を集めました。段々遠くまで行かねば薪が無くなり、二月ごろには夜明け前に出て、日が暮れて帰るようになりました。

五月、遅い春が来て氷が溶け出すと農作業が始まります。私達は道路工事、鉄道補修、農作業、建築作業、工場手伝い等の班に分けられ作業に出ました。国際法で将校の捕虜は仕事をしなくてもよいことになっていますが、ソ連では私達に仕事

をさせて欲しいとの請願書をスターリンあてに出させました。

日本政府は「戦争に負け、賠償金をソ連に払わねばならないが、金が無いので捕虜の労働力で払うから、戦後復興に使ってくれと言ってきた。お前達も働け、そのためにこの書類に署名せよ」と言うもので、私達は進んで署名し、作業も積極的にしましたが、帰国して「政府はそんな事を約束した事実はない」と知りました。

ソ連ではほとんどの作業にノルマがあります。私は夏の間、農作業班でクルホーズ（国営農場）で働かされ、農場内のバラックで暮らしました。仕事は種の植え付け、草取りが主な仕事でした。ノルマは、一人何平方メートルと決まっており、草取り等は草が生えていても無くても同じ広さで、草の多い場所に当たった者は大変でした。初め私達は一生懸命働いてノルマを早く終わり、ゆつくり休みましたところ、次の日からノルマが増やされました。以後は要領よく一日がかりで割当作業

をすることにしました。

十月に入り収穫が終わると、また収容所生活が始まります。抑留生活三年を振り返ってみますと、昭和二十年、二十一年の冬が最も悪く、食物、飲み水の支給が少なく、寒さと飢えのために多数の栄養失調者があり、ひどい者は静かに死んでいきました。その死は横に寝ていた同僚が気付かず、朝起きないので初めて気付く有様でした。死人が出る土葬のため穴を掘って埋葬するのですが、地面が凍結し、ツルハシが刺さらず、重労働だったことを思い出します。

また、冬の作業で嫌だったのが、便所掃除でした。小便是、流れて平らになり凍るのですが、大便是凍って積み重なります。それを数日ごとにハンマーと籠を持って撤去し捨てるのですが、着替えないので、作業着も平常着と同じですから、外でいくら払っても、部屋に入ると糞塵が溶けて、嫌な臭いに悩まされました。冬の生活を乗り越え、春、夏には野草、木の芽等を腹いっぱい食べ

体力を取り戻しました。また、ソ連の食料支給も年ごとに多くなりました。

昭和二十二年の九月初め、収容所に全員集められ「一部を残し日本へ帰す。荷物をまとめよ」と達しがあり、残留者名が呼び挙げられました。私は残念ながら残留組三百人の中に入っておりました。

帰還組の喜びと対象的に残留組の失望は大きなものでした。しかし残留組も直ぐ帰れる希望が出来、元気に皆を見送りました。主力が出発してから急に食物の割当でも増え、作業はバラックの掃除程度に減りました。

私達は帰る日を今日か明日かと待ちましたが、帰還発表は無く昭和二十二年の冬を迎えました。年が明けて昭和二十三年六月、迎えの列車が来ました。冬のシベリアは見渡す限り雪で、どこも外は凍りつき、一人見ませんでした。夏は一面の荒野は花でいっぱい、行けども行けども花、花、本当にシベリアは広いと思いました。六月の

終わりごろやつと海岸に出、海を見た時は本当にこれで内地に帰れるのだと、涙がでました。

ナホトカ収容所には多くの人が帰還の船を待つており、建設途上のナホトカのビルディング造り、道路の整備、土木作業等をしていました。夜は洗脳教育が盛んになり、帰ったら日本を赤化するよう指導されました。帰還船は十日に一隻ぐらい入港し、その都度収容所の人員は入れ替わりました。

昭和二十三年八月八日、私たちの乗る帰還船「永徳丸」が入港、あれが帰還船だと言われた時は、苦勞を乗り越えやつと家に帰れると思うと涙が止まりませんでした。八月十日乗船、十三日朝、京都府舞鶴港に上陸しました。舞鶴では米兵に頭からDDTをかけられ、宿舎で一泊、帰還手続きを終え、十四日に召集解除、満期除隊となり軍務を解かれて家に帰り、父母と再開することができました。